例会レジュメ

多良木相良氏の城館遺跡

鶴嶋　俊彦

はじめに

相良氏の政治・軍事動向から得られる政治的時期区分としての最大の画期は、15世紀半ばの人吉の相良前続による多良木相良家討伐と、これに続く永留長続による相良惣領家簒奪である[1]。本稿はその画期までに形成された多良木相良家に関わる城館を検討する。

多良木相良家の城館については、1978年の熊本県教育委員会編『熊本県の中世城跡』や翌年の『日本城郭大系第18巻（福岡・熊本・鹿児島）』、1980年の多良木町史編纂会編『多良木町史』、同年の熊本県教育委員会編『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』に論及がある。とくに「里の城遺跡」の調査報告は、多良木周辺の城跡に関して綿密な聞き取り調査や測量調査が実施されるなど、極めて有益な報告で参考となる。

1．史料に登場する城館

多良木相良家第1期　初代の頼景・長頼・頼氏・頼宗（人吉相良家では長頼三男頼俊・長氏・頼廣）の時代で、ほぼ鎌倉時代に相当する。相良家惣領で人吉庄惣地頭でもあった相良長頼は、寛元元（1243）年の訴訟で人吉庄の北方地頭職を没収されるが〔相5、関東下知状〕、球磨郡内の多良木や人吉庄に所領をもつ球磨郡を代表する武士として成長していた。人吉庄地頭の後継となり佐牟田家を興した頼俊は、寛元二年の下地中分によって失われていた「佐牟田堀内」（の地頭居館）を、建長6（1254）年の「相博」によって奪還した〔相14、鎌倉将軍家政所下文〕。堀内は私有権が強く認められた領主経営の本拠で、次の南北朝期の暦応3（1340）年には「当城」として城郭化した〔相87、相良蓮道譲状〕とみられる。

この時期の後半、頼氏は多良木の頼宗に本貫地遠江国相良庄の「堀内」を譲与した〔相33、相良上蓮譲状〕。その遺跡は東中館跡（静岡県牧之原市相良町大江字箱瀬）とされ、発掘調査の結果、12世紀代に成立し13世紀世紀初頭までの存続が確認されている[2]。

多良木相良家第2期　経頼・頼仲・頼忠（佐牟田相良家の定頼・前頼）の時代で、南北朝内乱期に相当する。内乱期の当初は永吉庄の領有をめぐる少弐氏＋佐牟田相良家・庶氏連合と多良木相良家＋「球磨上郡人々」連合との対立となり、戦場は永吉庄内の木枝城や山田城などの少弐氏からの「御預城」の争奪戦が中心となる。興国元（1340）年に多良木相良に同心した人吉の相良祐長は、籠城していた山田城を引退した後に「経頼一所城」に楯籠っている〔相108、相良祐長軍忠状案〕。

その後の多良木家と佐牟田家の両家は、内乱期を通して一揆（「球磨郡一同之義」）と離反を繰り返すことになる。康永2（1343）年には少弐頼尚から「当城寄宿一族他人」の面々の本領を認める奉書を獲得した経頼が、定頼宛に北朝方となったことを伝えている〔相115、少弐頼尚奉書案・相116、相良経頼書状〕。元中8（1391）年に佐牟田家前頼が「（多良木）相良孫五郎」宛てに「多良木競望之事不可有」という多良木領の不可侵契約を結び〔相186、相良立阿契状〕郡内での内乱が収束した。

多良木相良家第3期　頼久・頼観（佐牟田相良家の實長・前続・尭頼）の時代で室町時代中頃にあたる。両相良氏の平和条約が維持され、正史上も郡内が平穏な期間となる。一方、応永年間には佐牟田相良家は隣接する薩摩・大隅への積極的な派兵を繰り返す。前続時代（の応永29（1422）年頃カ）には薩摩国山門院350町を知行する〔相231、相良氏山門知行以下由緒書〕。

その後、年不詳だが両相良家の平和条約が破綻し前続による多良木家「退治」（頼久没年とされる正長元（1428）年頃と推定）があり〔願成寺文書「相良為続置文」〕、頼久は肥地岡・鍋倉・古多良木の武士たちと五木経由で国中に立ち退く事件が伝わる〔『御当家聞書』〕。『南藤蔓綿録』所収「多良木家御系図」によれば、肥地岡・鍋倉二名は経頼の弟を出自とする庶子に確認され、古多良木も一族であろう。

相良家正史[3]では、嘉吉3（1443）年に前続が逝去して虎寿丸（尭頼）が11歳で家督を継いだとする。同年は虎寿丸が青蓮寺阿弥陀堂を再興した年でもある〔青蓮寺棟札・天文11年棟札の裏面追記〕。現

青蓮寺にある阿弥陀堂は相良家初代惣領の頼景菩提のための堂で球磨郡支配の象徴的場所であった。虎寿丸を惣領後継者として仰ぐ佐牟田家支持の武士たちは、相良家統一を果たした前続を中興の祖として崇拝する意味も込めて阿弥陀堂が再興された可能性が考えられる。

その後、相良家正史では堯頼が菱刈へ逃亡し、一族の永留長続が惣領を継承し、多良木家の頼観・頼仙の二人を討伐して球磨郡内を統一したとするが、これを裏付ける同時代史料は一切存在しない。その頃の戦乱を記録した唯一の一次史料「犬童重国軍忠状案写」〔三村講介 2016〕によれば、文安5（1448）年4月の①薩摩瀬村上戸之尾での合戦、②同年5月の人吉勢による永里之山城攻め、③同年5月の真幸の北原勢の「上村之城」攻めでの防戦、④同年7月15日の「水面ノ城」に牧四郎左衛門とともに寄せ合い小田但馬を討ち取った合戦などが記載される。これらは正史に見えない戦で、軍忠状に登場する武士たちは正史にある頼観・頼仙らを討ち取った長続による「多良木討伐」に参陣した武将名と多くが重なる。

天文5（1536）年成立の「沙彌洞然長状」に始まる相良家正史の作成過程で犬童重国軍忠状が引用されたことは『南藤蔓綿録』などに確認でき、永留長続による相良家統一という正史編纂の目的から、犬童重国軍忠状案写にある一連の軍事行動は長続の多良木討伐にすり替えられ、相良家統一のストーリーが作り上げられたと推測できる。

因みに統一後の多良木は、長続の譲りによって、その四男頼泰が知行し「多良木殿」と呼ばれた。文明3（1471）年に頼泰は讒言によって知行を解かれ、13年後の文明16年12月に為続は頼泰に多良木村を進上し、翌年3月に頼泰は嫡子らとともに「先例に任せて」多良木村に入部し「鍋倉城」において祝儀を行った〔相233、相良頼泰置文〕。しかし、頼泰は3年後の長享元（1487）年6月13日に再び謀反の疑いをかけられて「人吉下原宿所」で生害となる〔八代日記・嗣誠独集覧〕。多良木は再び為続の直轄領となり「多良木役人」を置いて上球磨の支配が行われ、天文14年（1545）7月13日に頼泰の孫である相良治頼が「多良木之城ニ打入」二ヵ月にわたり占拠した〔八代日記〕。永禄2（1559）年の瀬野原合戦では岩崎加賀が城番を務める人吉勢の前線拠点となっていて、8月15日夜半に湯前勢が押寄せる合戦があった〔嗣誠独集覧〕。

2．多良木村の範囲

先ず多良木相良氏所領として一次史料に現れる「多良木」の地理的な位置を確認する。建久8（1197）年の肥後國球磨郡田数領主等目録写〔相2〕には、人吉庄600丁・永吉300丁・公田900丁・豊富500丁・豊永400丁と並んで、「多良木村百丁没官領　伊勢弥次良実名不知」とあり、この多良木村がやがて相良頼景の所領となる。また、寛元元（1243）年の関東下知状〔相5〕の3条目事書には、「多良木内古多良　竹脇　伊久佐上　東光寺以上四箇村事」とある。この四箇村の田地が40丁で、多良木村はおよそ10箇村程度の小村から構成されていたと推量される。古多良は大字多良木に古多良木の字があり、伊久佐上と東光寺は大字黒肥地に「軍野」「東光寺」という字が所在する。また、正応6（1293）年の相良上蓮（頼氏）譲状〔相32〕にみえる在家のうち「う志ゝま」（牛島）は大字多良木の球磨川南岸に、「まかと」（馬門）はその対岸に字として確認でき、さらに延慶2年（1309）の肥後国多良木村地頭代陳状案〔相38〕に見える「八岡名」は、大字多良木の球磨川北岸に八日の集落名や字八日原に地名として遺る。

これらから鎌倉時代に多良木相良家が所領とした多良木村は、近世の多良木村と黒肥地村を合わせた部分に比定できる。なお、現在の町内にある近世の久米村・奥野村は、豊富庄に含まれる久米郷の内で、黒肥地村は、延宝4年（1676）の多良木村からの分村である〔多良木町史〕。

3．城館遺跡の比定

鎌倉時代の多良木村は相良家惣領頼景の所領地で、その居館は正史では大字黒肥地の字東の前の球磨川河畔の「相良頼景館」が伝承地となるが、これを裏付ける同時代の一次史料はない。この遺跡については、本報告書本文で詳細に報告されるため本稿では割愛する。

南北朝時代になると、「経頼一所城」や経頼が一族らと寄宿した「当城」を見い出すが、具体的な地

名がなく、その比定には経頼拠点の解明が必要となる。

『嗣誠独集覧』の「上相良相良多良木連続之次第」には、「第八（代）、左衛門尉頼観頼久御嫡子也、文安五年戊辰八月四日御忌日也、法名蓮珍古多良木ニ居住、今ノ城林ト云是也、伝記曰、頼氏ヨリ頼忠迄五代鍋ノ城居住、頼久・頼観二代ハ内城ニ居城ノ由、今ノ里城トハ御仮屋ノ屋敷ニテ御座候由」と伝えている。

また、同書には第二代頼氏が建永２年（1207）に北野天神を鍋城に勧請し、これは今の里ノ城天神でその遷座は正保３（1640）年のことで、里ノ城鍋倉諏訪元屋敷は鍋倉天神とも称したという。このほか文応２（1261）年には鍋城に長運寺が再興され貞治６（1367）年に焼亡したが、永徳年中（1381～1384）に黒肥地永野に移され、今の長野長運寺薬師堂の釈迦如来が長運寺本尊とする記事もある。

ところで現長運寺境内にある西光寺厨子銘文には、人吉相良の長輔（長毎）が大檀那として「当所城内諸侍諸生男女子孫繁昌」などを祈願して明応10（1501）年に厨子を修造した旨が記され、里城弓削田家の氏神堂の御正体墨書名には「多良木鍋城西光寺八王社壇始奉建立、本地御正體千手千眼一輪、長禄四（1460）年三月十五日、住持弘辨七十四歳」とある〔『多良木町史』資料編〕。すなわち西光寺厨子銘文の「当所城内」とは鍋城のことで、明応10年には侍や諸人が住む城郭であったことになる。

江戸時代、「上相良相良多良木連続之次第」のように第２代頼氏から第６代頼忠（13世紀初頭から15世紀前期頃）までは鍋城を居城とし、頼久・頼観の代（15世紀中ごろまで）に内城に移ったという伝承が形成されていた。しかし、鍋城は統一後の相良氏の城として16世紀初頭の長毎時代まで存続していたことになり、相良家正史の利用には慎重さが必要となる。

また、一次史料に出る「経頼一所城」や経頼の「当城」は、伝承では鍋城跡となるが、南北朝期初期の人吉相良氏は平地館の佐牟田堀内を「当城」と呼んで城郭化していた可能性があり〔相87、相良蓮道譲状〕、「経頼一所城」や経頼の「当城」が例えば伝相良頼景館や後述の東城跡のような平地館であった可能性も考えておく必要がある。

一方、内城は大字黒肥地字土屋の段丘北西端が伝承地で、仮屋だったという里ノ城も大字多良木に里城という字として伝承されている。

ところで室町時代中期に頼久とともに出郡したという肥地岡・鍋倉・古多良木の庶子一族も名字の地に館を構えていたとみられる。そのうちの鍋倉氏の館は、字里城の一角には「なべくら」の屋号を遺す宅地があり里城に比定できる。また、このことから相良家統一後に登場する多良木殿頼泰の「鍋倉城」の比定地も里城となる。なお、鎌倉時代末期の元応２（1320）年の相良頼資申状案〔相46〕によれば、心蓮（相良頼秀）が館を置き八岡名と称したところを乗心は鍋倉名と名付けて横領していると頼資が訴えていて、八岡名と鍋倉名が隣接した名であったことを指している[4]。

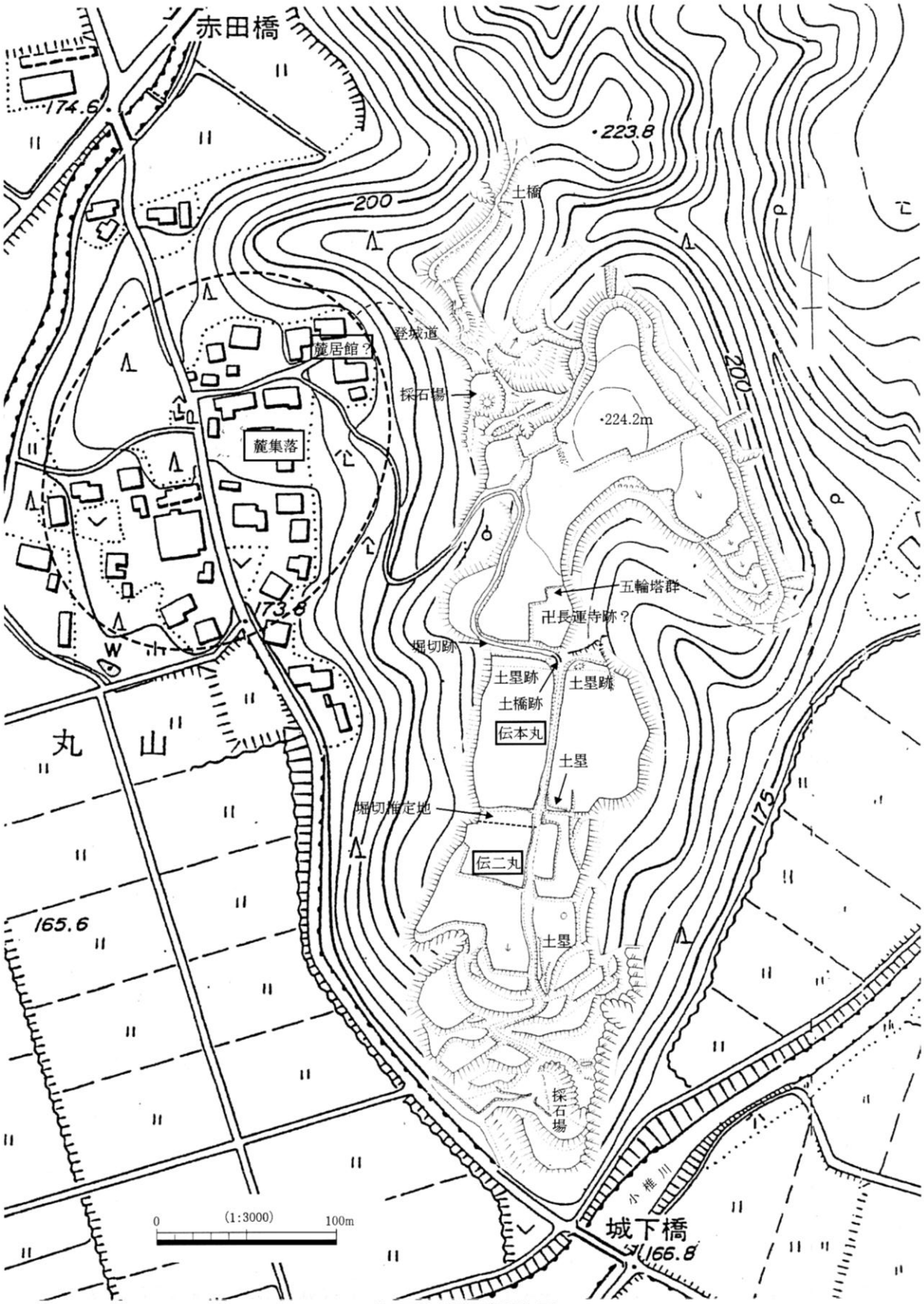
肥地岡氏の館は、江戸時代後期の「球磨絵図」〔西 重美氏所蔵〕に里城西隣の小村として「肥地岡」の記載があり、字馬門付近の台地上に推定できる。また古多良木氏の館は、字古多良木地内に該当するような遺跡はないが、柳橋川を挟んだ北隣の字東の河岸段丘に「城山」という小名をもつ鎌倉時代の遺跡が候補地となる。

第１図　鍋城絵図（熊本県立図書館蔵）

４．多良木相良氏関係城郭の構造

(1) 鍋城跡（大字黒肥地字鍋城）

遺跡は、標高224 m、比高差60 mの加久藤溶結凝灰岩を基盤とする台地で、周囲には浸食崖が発達する。台地北端に東方からの浸食による迫地が野首を形成しており独立


赤田橋
174.6
223.8
200
土橋
登城道
麓居館？
採石場
224.2m
麓集落
五輪塔群
卍長運寺跡？
173.8
堀切跡
土塁跡
土塁跡
土橋跡
伝本丸
土塁
丸山
堀切推定地
伝二丸
175
165.6
土塁
採石場
小椎川
城下橋
166.8
0
(1:3000)
100m

第２図　鍋城跡縄張り図

的な地形となる。台地面は南北 400 m、東西で最大 150 mの規模があり、台地周りの切り立った加久藤溶結凝灰岩の崖を要害に利用する。

近代初期の「球磨郡村図附属図」では、台地中央に土橋と見られる通路をもつ東西方向の堀切が描かれる。堀切の南側台地は大きく描かれ「本丸」「二丸」と記入された畑があり、一方の北側は小さくデフォルメして描き城外として意識しているように見える。台地面は北端部を除いて耕地として開墾されており、現在は放置され藪となった部分が多い。1980 年刊行の「里の城遺跡」調査報告書に鍋城跡での聞取りや踏査の貴重な記録があり、これを準用しながら縄張りを考察する。

現在の堀切部分は農道で、現状は長さ 45 m、幅 3 m、深さ 1 m弱の凹道であるが、1980 年頃は幅 5 ～ 7 m長さ 50 m、深さ 1.4 m～ 2.3 mの規模があり、堀切東部の南側には長さ 10 m・幅 5 mの土塁が残っていたというので、堀切南の伝本丸側に土塁を備えていたらしい。

この農道は南側台地を縦断して南端のつづら折れの坂道へと続くが、伝本丸と描かれた畑の南部は台地のクビレ部となり、1.2 mの段落ちで伝二丸となる。クビレ部の農道東側には幅 6 m、長さ 10 mの東西方向の窪みが残存し、直上の畑南縁には高さ 0.6 mほどのL字状の土塁跡がある。以上から、クビレ部分に台地を東西に貫く堀切があった可能性が指摘できる。なお、農道西側には道路に沿って野面積みの石垣があり、二丸下の畑の東部には井戸跡があるが年代不明である。また、つづら折れの坂道の中途にある複数の削平段が曲輪跡か耕作地跡か判断に苦しむが、岩壁が露出した箇所は凝灰岩の石切場跡である。

一方、堀切の北部では、すぐ北東の畑（8056 番）の奥に五輪塔群（火輪 2、地輪 4）を確認しており、上述した長運寺か西光寺の跡の可能性が考えられる。台地北端近くの栗林は標高 224.2 mの最高地点で、北端の北側と北西側斜面に幅 4m 深さ 1 m長さ 15 m～ 20 mの竪堀がある。また、この北部台地の北縁から東縁下には高さ 2.5 ～ 5 mの切岸があり幅 3 ～ 6 mの帯曲輪状の地形となっている。しかし、南東部ではその幅が 1 m程度となり斜面を下る山道に接続するので後世のものかもしれない。

北部台地の北側には「古城堀」と呼ばれる自然の迫地があり、北方丘陵との鞍部に丸山集落からの登城道が取り付く。村田修三氏が「カニばさみ状の土塁」とした地点があるが[5]、この土塁は石切場の残存部である。北側の尾根筋の二段の削平段を登ると北側縁部に高さ 0.7 mの土塁をもつ長さ 50m の狭小な平場があり、その北東基部に両側が竪堀で土橋となった虎口空間がある。ここから先は幅 2 ～ 3 m長さ 25 mの通路となった細尾根で北方丘陵本体に接続する。ここが城域の北端であろう。

『多良木町史』には、「城の東方に馬場を回らし、その下に古城堀と称する掘割」、「岩風呂と称する泉」、「城の一隅から当時の遺物である多数の糸切文底の土師器と、中国の南宋時代の青磁片が出土」といった記載がある。また、168 頁には「鍋城望楼址」と題された複数の柱穴ないしは礎石跡らしい遺構を描いた図面が掲載されている。昭和 47 年 12 月下旬に実施された発掘調査であるが、これに関する記述はなく発掘調査箇所や遺構・遺物の詳細は不明である。

以上、鍋城は独立地形に近い溶結凝灰岩台地の周辺に発達する急崖を天然の要害として築城され、その立地や構造は南北朝内乱期の史料に見える「木枝城」に比定される岩城跡 (錦町大字木上字岩城) に類似し、同時代の「経頼一所城」や経頼が一族らと寄宿した「当城」に比定しても矛盾はない。ただし、伝本丸部分は台地を二つの堀切で分断して方 80 m程度の主郭を形成していた可能性がある。そうであれば、その使用（修築）年代は統一相良時代まで下降するかもしれない[6]。なお、丸山集落は宮ケ野川左岸の段丘上のまとまった地形に立地しており、麓集落や居館に相応しい位置にあり、往時の登城道は丸山集落背後からのルートであろう。

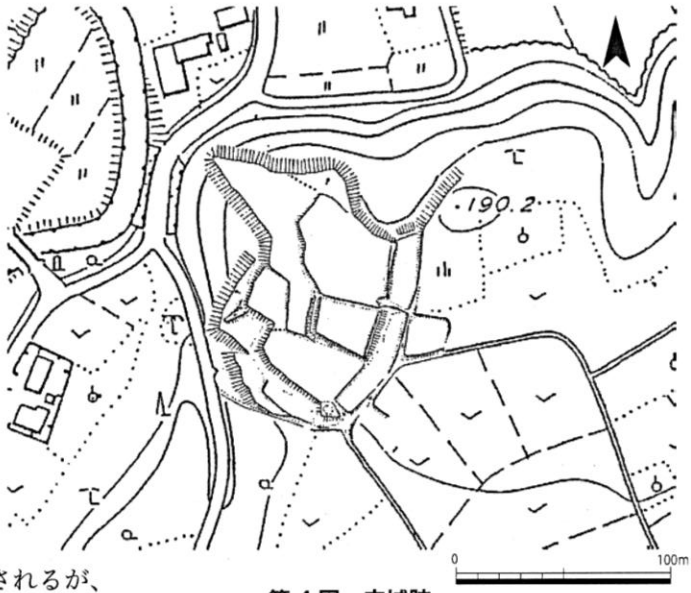
第 3 図　内城絵図（熊本県立図書館蔵）

(2) 内城跡（球磨郡多良木町黒肥地字土屋）

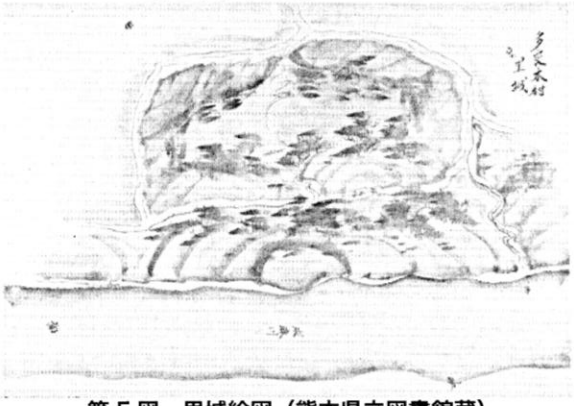
室町時代中期（15 世紀前半）の相良頼久・頼観の館城とされる内城跡は、相良氏菩提寺であった青蓮寺の北側にある標高 190m 比高約 30m の台地北西端に位置し、「ウチジョウヤマ」と呼ばれる。

「球磨郡村図附属図」では、鈎型の曲輪縁や堀切と推定される書き込みがあるが正確性に欠ける。現地で縄張りを踏査すると、幅 13 m の堀切を設けて台地本体から切り離して城域を画し、北・西・南は自然の崖面を利用したシンプルな縄張りであることがわかる。

測量調査報告（『里の城調査報告書』所収）によれば城内は四区画に分れるとされるが、切岸の連続性や高低差、配置からすると堀際に土塁をもつ北東部分が主郭で、その西側の一段下がった部分に副郭の曲輪群、さらに高さ 4.5m の切岸下にある崖際の腰曲輪群から構成される。主郭の東側に推定される堀切の埋没状態が不明で、土橋が存在したのか現状では即断できず後世の農道の可能性もある。縄張りとしては南端の農道付近を出入り口とみたほうが妥当だが、これも確証はない。



第４図　内城跡



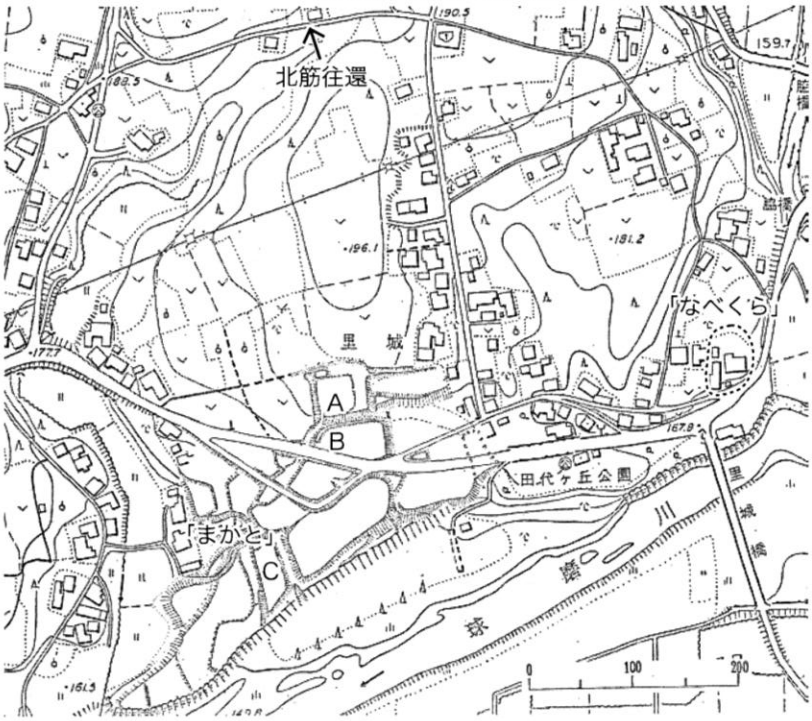
第５図　里城絵図（熊本県立図書館蔵）

(3) 里城跡（大字多良木字里城・九鹿・馬門）

「球磨郡村図附属図」では、北筋往還の南側の里城台地一帯を描いているが、城郭の構造に関するものは一切描いていない。

この絵図のちょうど中央あたりに推定される箇所に『里の城調査報告書』所収の「九鹿地内の城跡」が確認されているが、筆者はその南の球磨川右岸段丘上にも連続する曲輪群を確認している。

この城跡は里城と馬門の集落の中間の標高 190m ほどの丘陵頂部にあり、鍋倉氏館・鍋倉城・多良木之城の比定地でもあるが、肥地岡氏館が存在した可能性も秘めている。そのため遺跡名として地名を



第６図　里城跡

採り里城跡と呼称することにする。

「九鹿地内の城跡」は遺跡の北端Aにあり、西・南・北に横堀を廻し、東を土塁で囲繞したと推定される方50m規模の方形居館である[7]。

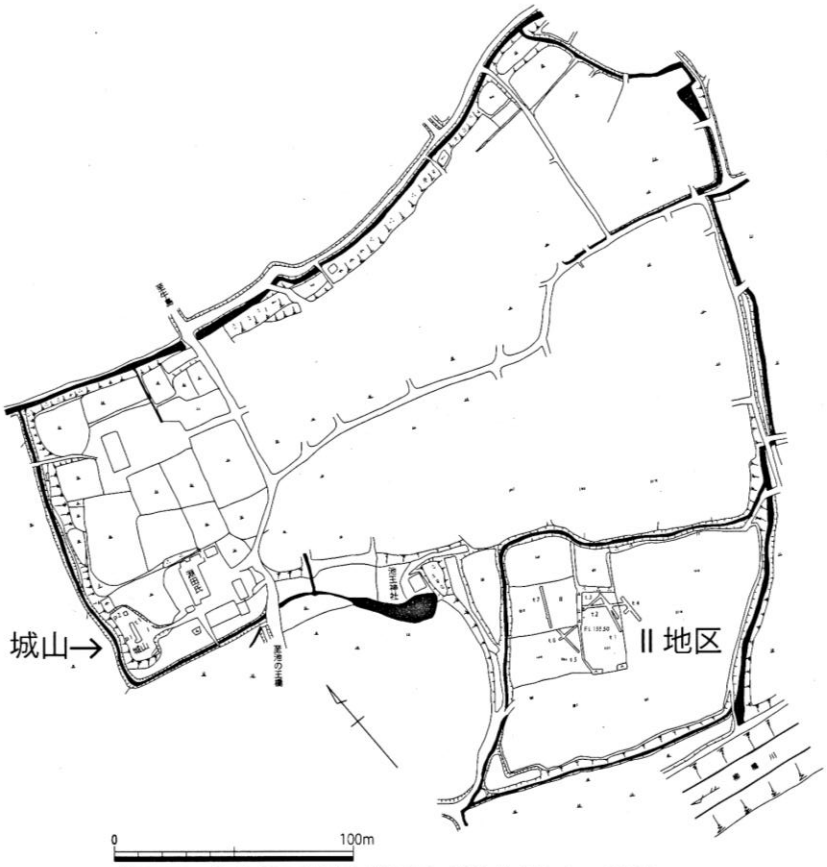
その南堀に接して北辺に土塁をもつ曲輪Bが展開する。この曲輪は新旧の県道によって分断されているが、長軸150m短軸100mの曲輪に復原され、さらに球磨川右岸側丘陵上となる南西側にも堀切で仕切られた南北70m東西20mの曲輪Cがある。また、県道工事前には東側の旧田代公園との間には「里城の堀」と呼ばれた帯状窪地が「九鹿地内の城跡」の南側堀に続いていたという〔『里の城調査報告書』〕ので、一段下がった東部にも附属曲輪があった可能性がある。

(4) 東城跡（大字多良木字東）

標高155mの球磨川低地に突出した比高5mの河岸段丘上にある。所在地は古多良木とは柳橋川を挟んだ北岸にあり、古多良氏館の可能性をもつ。この遺跡は多良木町史編纂関係で古代の球磨郡東郷の想定地とされ、段丘先端の「城山」部分と段丘基部のII地区で発掘調査が行われている。大型の鎬蓮弁の青磁や白磁、天目、糸切底土師器、瓦質の擂鉢などの破片が出土し、同時に出土した焼米のC14測定の結果は1215年＋−80年とされ、町史では平安後期から鎌倉前期にかけての居館があったと結論している。

現在、その出土遺物を実見することが出来ないが、町史掲載の図面を見る限り、土師器は13世紀後半以降で、白磁はよくわからないが、青磁は同安窯で劃画文、蓮弁文があり、瓦質土器は頼景館でよく見る擂鉢、瓦器は中世須恵器の破片とみられ、年代観は13世紀後半〜14世紀くらいという年代観が妥当である[8]。

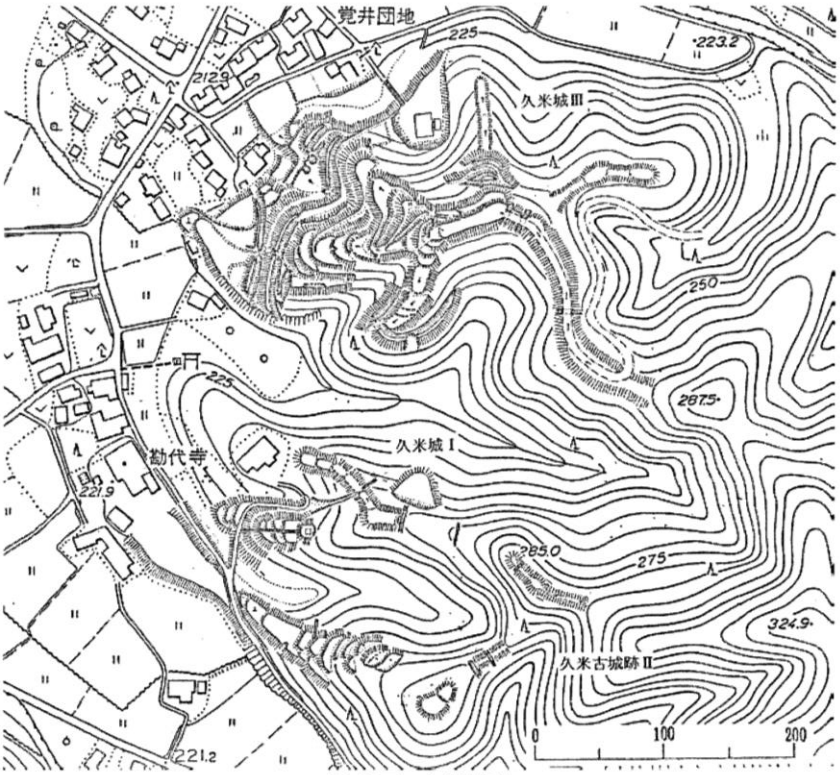
段丘先端に土塁などの遺構は確認できないが、方形基調の段丘形状や道路、地割・水路から、西端には東西90m南北120mの居館が推定され、出土品からも鎌倉時代の多良木氏関係の館である蓋然性は高い。ただし、15世紀中ごろの相良頼観の頃まで遺跡年代が下降するのかは今後の調査による検討が必要である。



第7図　多良木町東城山付近図（『多良木町史』所収）

(5) 久米城跡（球磨郡多良木町久米字古城・天神宇土・今山）

文安５年の内訌時、久米城は多良木の相良頼観の持城で、源島某が在番という（『南藤蔓綿録』）。久米には北尾根・中央尾根・南尾根それぞれに城郭を確認しているが、構造上の特徴からそれぞれを戦国時代・南北朝時代・室町時代に推定しており、南尾根の城跡が内訌期使用の久米城に該当する。



第８図　久米城跡

中央尾根から派生した尾根筋の鞍部に２本の堀切を入れて遮断して城郭化したもので、主郭相当箇所は北東半分が削平されているだけでほとんど加工されていない。北西に下降する尾根上には削平地が曲輪なのか耕作地なのか判断に迷うが、尾根筋を断ち切っている町道部分に堀切があった可能性がある。勘代寺がある麓の字古城（フッジョウ）が当時の城代の屋敷の想定地となる。

５．まとめ

これまで多良木相良氏の歴史は相良家正史となる編纂物を参考として語られることが多かった。その滅亡による相良家の統一は、一次史料により 15 世紀前半代の人吉佐牟田相良家の前続時代の「多良木討伐」にあり、文安５年とされる永留長続による頼観･頼仙の討伐による多良木家滅亡のシナリオは、改めて吟味する必要が生じてきた。

関係する城館についても相良家正史に始まる伝承を根拠に比定されてきたが、鍋城跡については、主郭が台地を堀切で分断して造成した縄張り構造の可能性があり、その存続も寺社関係銘文から 16 世紀初頭まで下降し、統一相良氏によって使用されていたと解釈されることを指摘した。南北朝時代の史料にある経頼の城が鍋城に該当する可能性はあるが、構造も含めて発掘調査による究明が必要であろう。

内城跡は正史の伝承しか根拠がなく、堀切や虎口の構造や出土品による解明がされないと、頼久・頼観時代の城という確信をもつには至らなかった。

里城跡北端には「九鹿地内の城跡」と命名された土塁囲みの単郭城館が立地し、それは鍋倉氏ないしは肥地岡氏の館跡であった可能性がある。その南側の丘陵に連続して曲輪が展開する城郭部分は群郭式構造で、永留長続の居城に推定される山江村高城跡に類似する。長続の四男相良頼泰の鍋倉城、それを踏襲した統一相良氏の多良木之城に比定しても矛盾がないことを指摘しておきたい。

古多良木は最後の多良木相良家当主とされる頼観が居住していたという伝承があるが、その隣接地となる東城跡は出土遺物が鎌倉時代のもので、沖積平野に大きく突き出た立地や方形基調の地形・地割などを勘案すると、多良木相良氏の初期拠点形成に係わる居館である可能性が濃厚である。また伝承どおり室町中期に頼観の出自となる館があったとすれば、多良木相良氏一族の中での「古多良木」氏の位置づけや名字の由来など、今後検討すべき事項も浮かび上がってくる注目しておきたい遺跡である。

参考文献

梅山無一軒著牛島盛光監修 1977『南藤蔓綿録』青潮社
熊本県教育委員会編 1977『蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県文化財調査報告第 22 集　熊本県教育委員会
熊本県教育委員会編 1978『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第 30 集　熊本県教育委員会
熊本県教育委員会編 1980『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査帆国書』熊本県教育委員会
熊本中世史研究会 1980『八代日記』青潮社
相良村誌編纂委員会編 1995『嗣誠独集覧』相良村誌資料編 2　相良村
田代政鼬著堂屋敷竹次郎訳 1972『求麻外史』青潮社
多良木町史編纂会編　1980『多良木町史』多良木町
東京大学史料編纂所編『大日本古文書　家わけ五ノ一　相良家文書之一』東京大学出版会　1970
人吉市教育委員会編著 1991『願成寺文書』人吉市教育委員会
人吉市教育委員会編 2014『人吉史料叢書　第 1 巻　御当家聞書』人吉市教育委員会
三村講介 2016「犬童重国軍忠状案の近世期写について」『ひとよし歴史研究』第 19 号　人吉市教育委員会

註

1. 鶴嶋俊彦 2015「文安五年相良家政変の実像」服部英雄他編『歴史を歩く・時代を歩く』九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
2. 小野真一他 1993『相良町東中館跡』相良町教育員会
3. 相良家正史とは、天文 5 年の沙彌洞燃長状に始まり、江戸時代に編纂された『南藤蔓綿録』『嗣誠独集覧』『求麻外史』などの相良家通史をさす。
4. 松本寿三郎 1980「上相良多良木連続之次第」上記参考文献『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告』所収の付論
5. 村田修三 1987「鍋城」村田修三編『図説中世城郭事典』第 3 巻　新人物往来社
6. 村田修三氏は註 5 において、台地南部を当初の城域、台地北部を後世の拡張部分とする。
7. 「九鹿地内の城跡」報告では、その北 53m に丘陵を東西に横断する幅 7m 全長 85m の帯状窪地を堀切(3)としている。縄張り上、「九鹿地内の城跡」との関係が説明しにくく、丘陵を東西に横断する道路痕跡の可能性も指摘しておきたい。
8. 多良木町文化財担当職員永井孝宏氏の教示による。